17-14　授業解題

島名：グローバル・イシュー

教科（領域）：国語

単元（教材）：「挨拶−原爆の写真によせて」

対象：７年Ａ組

授業者：國原　信太郎

1.　グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

本字のグローバル人材育成に向けた目標は「現在の国際状況を捉え，人間の生きる姿や国際社会について考えを深める」と設定されている。

教材は石垣りんによる詩「挨拶−原爆の写真によせて」である。広島の原爆投下をモチーフとして書かれた詩であるが，過去の歴史的事実として 25 万人が犠牲になった悲惨さを表現しているだけではない。広島に投下された原爆の何百倍にも当たる量の核兵器が存在する（この詩が作られた 1952 年当時）地球に暮らしていながら「すこやかな」「すがすがしい」顔で朝の挨拶を交わす私達の日常に対する「りつぜん」とした思いに，むしろ詩の中心テーマは置かれている。そして「見きわめなければならないものは目の前に／えり分けなければならないものは／手の中にある／午前八時一五分は／毎朝やってくる」と現代を生きる我々に問いかけてくる。

このような教材のテーマを活かすために，まず単元の第一次で JICA 主催エッセイコンテストの作品を作成することで，生徒はグローバルな課題に出会い，グローバルな課題に関する関心を高めて，この詩をグローバルな文脈の中で理解できるような素地を醸成することが目指されていた。戦争はまさにグローバル化の負の側面である。

また詩の読み取りのために，言葉のひとつひとつを丹念におっていく作業も行われたが，その結果読み取った作品の本質を「音読」として表現する活動が行われた。詩を声に出して読むことは残念ながら現代の国語教育の中ではあまり行われていないが，多くの文化の中で実践されている。今後多様な文化を理解する際の基盤となる学習活動であった。

2.　グローバル・スタディーズのカリキュラム開発に向けて

元々この詩は９年生の教科書に掲載されていた教材であり，詩の読み取りに予定よりも時間がかかってしまったため，音読の工夫の話し合いに十分な時間を充てることができなかった点が惜しまれた。

授業の最後で詩作成当時よりも拡散し，深刻化する核保有状況にも触れられていた。社会科等における紛争や核兵器の問題について考える学習と連携して進めることができれば，より深い学習につながることが期待できる。